

他力本願の生活

他力か無力か

他力という言葉ほど間違えられた言葉はありません。先日も某新聞に「支那の他力本願主義には全く困る……」云々とありました。こんな使い方は幾度も見ることでありますが、これは大変な間違いであります。かかる間違いを生ぜしめたことは過去の仏教者たちが大半の責任を負わなくてはなりません、仏教信者の生活のなつていなかつたことも原因であります。

先ず私どもは、他力ということは私が何もしないで他にすぎるという意味でないことを徹底的に申さなければなりません。私が何もしないで他にすぎるといふのは、他力ではなくて無力であります。新聞などにしばしば出る誤用は、他力ではなくて無力であることを他力本願と間違えたのであります。他力は永遠に他力でありまして無力ではありません。この世界には他力以外の何ものもありません。他力ということとは、私を宇宙、自然、社会、人類という有機的全体ときりはなして、私だけが孤立しては生きられないということが根本に承認されてあります。春が来れば堅い大地を破つて柔らかなわらびが萌え出でます。これ即ち一種の他力であります。私たちの社会的な生活は、社会の中にあつてその影響のもとに営まれてゆきます。随つて社会的意義を持たない唯単なる存在はあり得ませぬ。若し社会万人の声も願ひも眼中に無く、自分が思うように振る舞う者があつたとするならばそれは危険なる狂人か、悪魔かであります。若し日本をチヨコチヨコ怒らしておいて、いかなくなるとすぐ国際連盟にすぎると、そうしたことが他力であると考えられているのであれば、それは私どもの言う自力であり、或は相対他力であります。私たちの主張する他力とは絶対他力であります。断じて無力であつても自力であつてもなりません。

他力と独立

春が来れば花が咲きます。それは春自体が彼を莊嚴したのであります。「柳は緑、花は紅」という言葉が象徴するように、春は万象をして、それぞれの色に個性に輝きあらしめます。春は決して万象の独立性を奪うことなくして、それぞれの色に生ききらしめて、ますますその独立の尊嚴を發揮せしめます。真の他力がそれです。然し春は花を生み花は春に生きる、この点からいえば二ならずであります。この不二二の一体において春と花とは一如いちじゆであります。

親鸞聖人は「他力とは如来の本願力なり」と喝破かつぱせられました。即ち他力とは何ものもないとか、なげやりとか、消極的だとか、そうした一切の嫌な世界をはねかえして如来の本願力の生きる天地であります。この本願力は、決して相対的な対立にある力ではなくて、我と不二の關係において動き生きる力そのものであります。随つて真の他力は、決して人間を酔わしたり、眠らしたり、自暴自棄にしたり、厭世的にしたり、悲觀的にしたりするものではなくて、酔う者、眠つた者を覚まし、自暴自棄の

者、厭世的なもの、悲観的なもの、涙の谷に悶もたえる者を起ち上らせて、本格的な生活者たらしめる、智慧光であり、本願力であり、大慈悲であります。

若し仏教の自信を獲得したという人であつて、その生活そのものが、人生の大肯定を知らず、自暴自棄、悲観、厭世、等々の中に流転しているならば、それ自体、まだまだ本格的な生活を持たないが故に、真の意味においては仏教徒ではありません。仏教は他力ではなくてはなりません。而してその他力は、独立自尊の大信海にのみあり得ることでもあります。

間違つた仏教

私たちの使命は、仏教の中で、この真実の体力が歪ゆがめられてゐるのを正すことと、仏教外の澎湃ほうはいたる、あの多くの迷信者に智慧光の矢をむけることとあります。

如何に多くの所謂お同行たちが、涙の谷底で、夕飯酒としての話に、お他力に魂を麻痺しびれさせていることでしょうか。仏教はそれをこそ嫌つて智慧光に生きるべきことを提唱したのであります。半身不随の中風者を乳母車に乗せたような他力、盲に絵ほどきをするような他力、そうした一切の墮落からぬけ出して、もつと強く、明るく、本格的な歩みを生きぬく所に仏教があるのであります。

逃避をゆるさず

仏教の真実は、人生の逃避的態度を赦しませぬ。人生が如何に苦しくても現実から逃避することを許しません。逃避的態度は腰かけの態度であります。天地、自然、社会、浄土、仏、その一切と私が対立する時、逃避的腰かけになります。天地と一体、自然と一体、社会と一体、浄土、仏と一体、そこにのみ、自分の全体を打ち出した、本格的な生活があります。一本の花すら天地を代表します。私がすぐ如来と浄土と一体であり、一切衆生と一体である所には、逃避すべき世界を持ちませぬ。苦楽、順逆、一切の中にこれを背負いきつて、火の中にも、水の中にも、大行を精進し、忍にんじゆう終ふけ不悔の必然の大道を生ききります。

享樂的弱さから

(1) 社会の現実

仏教は弱者の逃避を許さぬと共に、一時的享樂によつて、苦悩をゴマ化し、何等の意識的、理想主義的、道義的自覚を失つて、ぼんやりとただ苦悩の中に、それを忘れようとする享樂的態度を許しませぬ。

現世の社会を見渡しますと、人心は不安動揺の極致であると云つていいと考えます。なぜ社会はこんなに行き詰まつたのでしょうか。そしてこれは真に憂うべき現象でありますでしょうか。それについて我等のよく考えておかねばならぬことは、社会は常に創造し進歩し発展するということとあります。社会が発展してゆく相は或は徐々にあり、或は急激であります。古い社会は新しい社会に移つてゆこうとします。その過渡期です。私どもは、今資本主義の生んだ機械、科学の生んだ過去の文化の行き詰ま

り、即ち子供が太つて靴が小さくなつた、その古い靴から新しい靴の転換期に立つているのです。それは世界的な大問題であります。金のある国も、ない国も、進んだ国も、おくれた国も皆がこの極めて困つた立場に立たされました。

(2) 生みのいたみ

然し社会は動いています。絶えず進展しています。この未曾有の大変化の時代に生まれ出たことを喜ばすにはいられません。尤も、喜ぶか、喜ばないかは其の人々の個人の自由ですけれども、一国の大臣も、小売店の主人も一切が、味わつてゐるこの辛苦こそは、やがて輝かしい新文化を生み出すべき、言わば陣痛です。生みの悩みです。

歴史的役割の上から、この生みの悩みに参加して、新文化の上に何かもたらすことは嬉しいことでもあります。

(3) 社会相の一面

現代都会の一つの傾向を代表するものは、カフェーであります。其処には豊醇な五色の酒と、エロチックな、或はセンチメンタルな歌が音楽がつぎつぎと流行します。そして夕べとなれば、五色の美しい電灯が輝き、紅い唇の女給たちが進出してゐます。あわただしい社会相、悩ましい青春、そして不安と焦燥、社会的な憂鬱、将来に対する不安、こうした数えきれぬほどの社会苦は、人間をして刹那的な享樂と、一時的逃避を求めしめます。何かでこの不安と苦痛を殺さないでは生きてゆけないのであります。こうした空気は田舎でも何処でも何かの形で現れています。それは同時に、人間を本能的にし、感傷的にし、刹那主義的にし、無道義的にし、廢頹的にし、無理想的にし、無氣力、無努力にします。それらは社会が生んだ悪い一面であります。

(4) 不合理の精算

然し他の一面、打ち続く不況は一切の不健全なものを打ちこわすと共に、社会が新しく誕生するように拍車をかけます。それと共に今迄、社会的習慣やら、因襲のために、社会的に許されてあつた一切の不合理なる存在に対して、遠慮会釈なく打破の鉄槌を下し、社会的没落を与えつつ、一切を清算します。それは丁度、秋から冬への木枯らしの如く、人生に対して少しでも有害であるものと、枯死に値する弱い者とを片端から打ちのめします。宗教の如きもすでに反宗教運動の嵐の中に立たされました。そうして遠慮なく清算されてゆきます。それはいいことでもあります。こうした嵐は不合理なものを打破するかわりに、生命の流れているものは、この冬期に鍛えられて「冬来りなば春遠からじ」で、来るべき日のために更生し、ほんとの人生の使命をはたしてゆきます。

(5) 仏教徒の態度

人間は如何なる場合にも理想主義者であらねばならない。私どもは幾多の使命を背負つてゐます。特に仏教徒として、仏教本来の根本精神を生かさなければならぬ

秋であります。仏教とは決して古い時代の型や、或は囚われた習慣の中でおとなしくしているものをよい人だと承認するものではありません。祖師たちは常に、社会のよき指導者であり、古ぼけた生命なき形骸から出でて、仏教本来の若々しい道に精進されました。それ自体が一つの革新的な存在でありました。

(6) 我らの使命

樹木でも古くなりますと、骨董的美をもつて来ますが、優雅であり、高尚であるかわりに、精力を失い、迫力を失います。現在の仏教においては特にこの感を深くします。社会的嵐に吹きまわられて、悲鳴をあげ、過去の因襲をそのままに、依然として老人組の気やすめ、未来浄土の夢のような歓びのみに、特殊の空気に酔わせて、一歩も現実生活それ自体を清算しませぬ、せしめようともしませぬ。

私達の運動は、こうした生命の枯れかけた古木、その因襲を打倒して、新たな澆刺たる元氣ある若芽を誕生生長させなくてはなりません。而してそれは、釈尊、或は祖師の根本精神を現実に生かしきる精神的復帰であります。祖師の生かしたるもの、或いは生かそうとしたものを真に生かしきる所に新たなる世界が生まれます。

(7) 金剛の真心

話がわき道にそれた感がありますが、仏教は、享樂によつて苦惱をゴマ化することを許しませぬ。あるがままを受取つて、其処に如来の本願力に乗託して強く生ききるべきことを求めます。我等は雄々しくもこの世界的苦惱を背負いきつて、雪の下に忍びつつ、真文化のために生ききらねばなりません。そのためには、我等は金剛の深信に安住しなくてはなりません。

祈祷をすてよ

(1) 責任

仏教は他力であります。絶対他力は、信の力によつて一切の責任を自己が荷いきつて、誰にもこれを譲ることを許しませぬ。自己のだらしない生活や罪惡を社会惡に帰して恥としないものが今日の空気ですが、かかる世相からは、真面目な社会運動すら生まれてきませぬ。

(2) 邪神をすてよ

責任を他に転嫁することが許されない仏教では、従つて、神をたてて、自分や一家等々のために功利的祈祷をすることを許しませぬ。見よ！ 社会のあらゆる層の人たちが、神に祈るあの低級なる文化人を！ 滑稽というよりも寧ろ悲惨である。迷信は弱い人間の必然に陥る墓穴であります。釈尊は、日の吉凶、方角の善惡、運勢判断、祈祷、邪神、そうした一切を引き破つて、独立者の雄々しき宣言をあげたのである。その独立者の衷心に生きるものこそ、如来の願心である。

(3) 他力に乗托せよ

他力に生きる心は「かなわぬ時の神だのみ」せぬ心であり「おかげ」にすがらぬ心であり、松葉杖をすてた相であります。即ち最後まで永劫に強く生きぬく生命の流れに乗った相である。俸禄おふちがなくなれば消えて逃げた大野九郎兵衛は、自力の態度であり、忠義に生きた大石は大和魂に乗托した他力のすがたであります。

(4) 愚者の悲哀

我が団の運動は「宗教は揚棄さるべきものだ」の信条に立つて、無教養の宗教人？ に向かつて高き大乘精神を提唱して、崇たかき文化人たらしむべく突進しなくてはなりません。先日某女子師範では出征兵士におくる千人縫ぬいいについて生徒間に激論がおこった。「千人縫いをつけておれば、絶対に弾丸があたらないから縫ぬいつて下さい。」それが大部分の生徒の信条でありました。少数の人が「そうではないのです、千人の魂をぬいこんだこの布をつけてお国のために働いて下さい」ということだと云ったので、遂に非国民よばわりまでされたそうです。千人ぬいで弾丸があたらないから縫ぬいつたから、いとやすいことですが、弾丸は物理的法則に支配されるのだから、あたる時にはあたりません。愚かであることは永遠に悲哀であります。人間は永久に迷信者であります。唯社会環境の改造と、崇たかき教養のみがこの人を救って、真の人にします。

他力とは純化された最高理想に生きることより外なものでもありません。無上正真の大道と言われる所以であります。

揚棄か絶滅か

秋田雨雀あきたうしやく氏等の「反宗教闘争同盟」の綱領、宣言等を詳しく読んでゆきますと「宗教は絶滅さるべきものであつて止揚さるべきものではない。」という文句があります。光明団員に博士もあれば、下女もいなさることを考えて、私は先づ「止揚」という言葉から説明して行きましょう。止揚という言葉は、又揚棄ようきとも訳されています。この揚棄とか止揚とかいう言葉を簡単に申し上げれば、ここに甲と乙と二つの言分いぶんがあります時、甲も棄てられず、乙もなくすることが出来ない時、この無視することの出来ない甲と乙とを、どちらも殺さずに、新しい丙の立場において甲も乙も生かした時、甲と乙とを揚棄した、又は止揚したと云うのです。私たちは、仏教の所謂煩惱を持つています。煩惱はこれを無くすることが出来ません。食欲、睡眠欲、性欲、名利欲、財欲この五欲に対する執着、これが思うままに得られぬ時、瞋しん恚い、愚痴の心をおこすこと、この貪、瞋、痴の所謂三毒の煩惱は決して絶滅さすことは出来ません。けれども我等は一面、道義心があります。遂には最高道義仏陀の世界すら考えます。然も遂にこの本能的な煩惱から一步も出ることが出来ません。そこでこの矛盾の世界において、我等は「煩惱は絶滅さるべきに非ず、揚棄さるべきものなり」との結論に達します。仏教の「煩惱即菩提」の世界だとか、「不断煩惱得涅槃」の天地だとかは皆煩惱と仏心の完全に「止揚」された世界であります。「煩惱は絶滅さるものに非ず、止揚さるべきものなり」という意味がわかったことだと思ひます。

二つの命題

私たちは今

「宗教は絶滅さるべきものであつて止揚さるべきものではない。」との考え方と、「宗教は止揚さるべきものであつて、絶滅さるべきものではない。」との二つの考え方の前に厳粛に立たされた訳であります。これはまだまだこれから先、人類の長い歴史の歩みが、どちらが正しいのであるかを決定するのであります。到底私たちの生きている間に解決さるべきものではありません。

然しこの二つの命題の前に立たされた我等は、過去の時代の人たちが味わつたことのない気持をもつて、宗教に対する再吟味をしなければならなくなりました。そうして私たちは右か左か、生活態度を決定しなければならぬハメに陥つたのであります。

我等の信条

唯物論的社会科学、マルキシズムは、私たちに色々な問題を与え、また当然うなづかねばならぬことを教えてくれました。特に世界的な経済問題を中心とする社会的逼迫は、マルキシズムの流行を余儀ないものになりました。今や、まるで一つの信仰的な様子になつて青年、学徒の間を蔓延してゆきました。そしてそれが宗教にむかつて組織的に撲滅の刃をふるい始めたことによつて、当然宗教それ自身が清算される時が来しました。私たちは、宗教否定の嵐の中に立つて、もう聞くべきことを聞きつくしました。そうして遠慮なく、「宗教は揚棄さるべきものである。絶滅さるべきものに非ず。」との信条が少しも動かないことを感得するものであります。

「善人なおもて往生す。いかにいわんや悪人をや。」

私は私がつまらないことで苦しむ時や、得手勝手に人を裁こうとする時や、尊い世界を見失うて単なる醜悪な世界に我を忘れようとする時、この聖人の深い世界が、私を静かな明るい広い世界につれ出してくれます。やりばもなくとりかえしのつかない過去を、高慢にも、小さきはからいによつてたてかえたり、飾つたりしようとする時、静かにこの悪人正機あくにんしょうきの召喚が、私を正しく一切をなげ出し、一切を背負いきらして深い懺悔の世界につれ出してくれます。

自然主義か理想主義か

日本は明治このかた、ヨーロッパの近代的傾向であつた所の、自然主義の考え方を輸入しました。一度自然主義の暴風の洗礼を受けますと、敬虔けいけんな人間の生き方はあつた方なく吹きとばされました。何もかも下へ下へと引きずり下ろしてしまひます。人間に神聖なる仏性、神性などがあるものか、人間は唯本能的な、欲求を満たして行くだけの、獸性的存在なので。醜悪な、愚劣な、無価値な動物的なものなのだ。そしてそれはせめらるべきものではなくて当然承認さるべきものだ。君子も、聖者も、人格者も、神格も、仏陀もあるものか、一切を愚劣な動物に迄ひき下ろせ！ 何だかだと云つた所で、人は一切が、本能的動物的な性の衝動から生まれたのだ。釈尊も人間な

のだ。殺人鬼も人間なのだ。そこに何のかわりがあるか……こうした考え方の変化は近代の日本をすさまじく流れる潮流でした。

だが、一切の尊きもの、神聖視すべきものを全て小人や動物的な地位にまで引き下ろし、白昼本能の暴露を当然とするこの風潮が、人間である私たちを心の底から喜ばしたのであろうか。私たちは、人生の底に、崇き文化を、仏の光を、つきせぬ愛を、非凡を、聖を、神聖を、尊厳を盛り上げられた文芸的作品にあまり接することが出来ないようになりました。一切を尊きものにまでひき上げよう、そして尊いものに結びつこう。人間の獣性の上に更に神性を仏性を仰ごう。崇き道義を廣大なる人格に拝み、深い愛の人の生活の中に見出そう。如何なるものにも、無限の愛を感じ、恵まれぬ大地の最後の一人の、如何なる無価値、醜悪、愚劣なるものの上にも、何等かの生の尊厳と神聖と、価値を見出そう。そうした、大慈悲の人格を求める願いを棄てることが出来ましょうか。

人間の求むるもの

私たちは歴史を繙いて何を求めるのでありましょうか。殆ど本能的に、聖者偉人の広い人格を、万人のための尊い犠牲者を、無条件の温い胸に受け取るのではあるまいか。どんな聖者、君子にも、人間的な獣性は残っているかも知れない。だからと云つて人間の神聖や人生の深さを棄てることは出来ません。自己の内なる獣性に深い懺悔をもちつつも、人間を成就しようと歩みつづけたゲーテや、音楽家にとつては致命的な病であるところの耳鳴りからやがて聾にまでなりつつも、その苦悩を、内部的な7智と意志とで超克しきつたベートーベンなどにすら尊いものを感じて、詩聖といい、楽聖という尊称をよろこんで奉るのが人間ではありませんまいか。

慈悲と智慧の流れ

私たちの云う宗教は、先ずこの人間の人格的要求、神聖に対する合掌から生れ出でたものであることを云いたいために、私は前の如きことを書いたのです。

真実の宗教は、徹頭徹尾、この人間性の要求であるところの、神聖、道義、そして慈悲の上に立脚すべきものであります。「善人なおもて往生す、いかにいわんや悪人をや。」崇い文化人のみが体感し得る、愛の道義の最も深い世界であります。宗教という宗教にこの理想主義のないものはありません。そうして本願他力の信仰こそ、長い時代の間に、聖者から聖者の人格の上に流れた如来の血潮の最純化された天地であります。一切の不純分や、功利的な打算を洗いすてて、人間の上に如来の純粹の血液の流れた世界であります。そして人間の最後の一人をももらすまいとする愛の躍動した信の大海の表現であります。慈悲と智慧との生命の流れであります。

聖道と浄土

初めて仏教、特に浄土他力教を聞く者にとつての問題は、最高理念界である浄土と、最高理想の具体的表象である阿弥陀仏との、実在を信ずるということにあると思います。浄土はこの世ならぬ所であり、仏は我ならぬ人格である。

由来聖道門は、娑婆即浄土と観じ、我即ち仏と悟る。これは、案外易々と受け入れられる思想であるが、この世を浄土ならぬ世界と観じ、我を仏ならぬものと信ずる浄土教は、信じられぬ空想と思われ、ひいては仏の实在を信ずることは困難だと思われます。然し、其の信じ易き聖道門と、信じ難き浄土門との間に根本的な差異があるのでありましようか。

積尊は法華經の寿命品において、我は大地において始めて釈迦牟尼仏と正覚を成就せるものでなくて、実に塵点久遠の無始の仏であることを叫び、入滅における涅槃經においては法身の常住を説き、如来の不滅を物語つていられる。この本覚門における積尊こそ、実に聖道教において悟入しなければならぬ法身仏であつて、生死の相をとれる積尊の背後にあつて、積尊を積尊たらしめたる…… 積尊の積尊、普遍、一如を我とする法性法身仏である。この生滅、栄枯、色形を超えたる久遠実成の法身を我なりと叫ばれたのが、即ち聖道門における積尊であります。

浄土教においては、その真実教として光センせられたる大無量寿經において、盡十方無碍光如来をば我ならぬものとして説きたまひ、一切衆生と共にこれに歸命し、その招喚を聞かんとせられる積尊を見るのであります。現実の大地に、衆生を真実に生かす純粹なる生命をも、如来の本願力と感得して、ひたすらに彼岸の仏の招喚に歸命して、廻向せられたる本願の大道を往生しようとするのが浄土他力教であります。

我を仏と観ずる聖道教は一度、肯定せられなければならない。そして深く大法を求めて内観するものが、やがて小我の迷妄を発見して、転回のはてに、如来を我ならぬものとして体験する浄土門こそ肯定せられなければならない。

仏を我と観ずることが、仏に近いか。仏を我ならぬものと信じつつ、限りなく仏に復帰しようとするものが仏に近いかは、誠に我等に与えられた課題であります。乃木大将は、忠を忘れて一生涯、不忠義者乃木、明治十年西南の役に敵の手に軍旗を奪われたる、許すべからざる不忠乃木たる自覚に立たれた。その將軍と、地位を利用して国家を売りつつも忠義顔をして恥じざる者と、いづれが眞の忠義であるのか、それでわかると思ひます。忠は肯定されねばならない。しかも不忠義乃木の諦観こそ、忠の眞実の相ではあるまいか。

仏は我ならぬものであり、浄土は現実ならぬ世界であればこそ、いよいよ深く浄土は深く我等の現実に関係し、仏は衆生の全我の上に生きるものであります。

理想と現実の矛盾を止揚することが人間の生活である以上、浄土他力教こそ、人間のほんとの宗教でなければなりません。

地上は楽土になるか

社会学者を任ずる人たちは、社会が弁証法的發展をなし、その支配がプロレタリアの手に移つた次の世界において、地上は、一切の権力支配から解放せられ、理想的社会の実現することを信ずるものの如くである。特にアナキストの人たちにとつては、それが、動かすべからざる真理である。だが闘争を通してやがて闘争の皆無なる社会が生まれるでありましようか。そしてその人間的苦悩が全部除却されて、人は宗教から自然に解放されて、その時こそ宗教の根本的に絶滅される時なのでましようか。

かく云う私どもも、かくまで行詰れる社会不安のなくなること、人間的生の享樂が平等に実現せられなければならないこと、そして人生の文化が限りなく發展せしめられなければならないことを求める点において人後におつるものではありません。けれども、執拗なる呪詛、そして鬭争流血を通してそれが成就されて、完全なる相互扶助の理想郷が出現することを、科学的に説明し、証明することが出来るではありませんか。それは依然として科学を超えて一種の信仰状態であるのではありますまいか。

苦と宗教

福が存在する以上、禍があるのが大地の相であります。地に生きる者は、善になりきることが出来ないように福だけになりきることは出来ません。私どもは経済問題の大解決を求めます。誰でもが教育を受けられる社会、誰でもが働かれ、食われ、樂しまれる社会、さらに統治機関の純化、権力の合理化、等々あらゆるものを求めつつも、大地の上が、永久に苦樂、禍福、善悪の対立する世界であることを、言いかえると、矛盾と苦悩とに満ちた世界であることを信じないわけにはゆきません。「生死の苦海ほとりなし……」との親鸞聖人の提言は大地から消えることのない真理だと思います。人間は社会環境が良くなれば、欲心も少なくなるものであると共に、与えられても与えられても満足しない本能、所謂貪欲の持ち主であることも事実であります。更に名利の子であり、人をしのごうとする権力の子であり、更に美しい性の対象を独占しようとしては、血の雨をも降らす存在であり、愛するが故に憎むが故に殺すことも厭わないものであります。更に我等は、生、老、病、死の軌道の上を走つてい9る、滅ぶべきものであります、悲劇は、この生、老、病、死を中軸として生まれます。特に死は、我等を「生死の苦海」の凡夫たらしめます。深く人生について考える者は、死こそ、万の問題の母であることを忘れることが出来ません。死は問題の母である。人生が嚴肅なものになるのも、道義や、医学が生まれるのも、詮じつめれば、死こそその中心であります。死がある以上は「生死の苦海ほとりなし……」が大地の実相であることをどうすることも出来ませぬ。

宗教はこの果てしなし生きること自体である苦悩なくしては生まれませぬ。蓋し、苦こそは、我等にとつての一番切実な、見のがすことの出来ない問題であります。随つて苦悩のあらん限り宗教を絶滅さすことは出来ません。見よ！あの宗教的無教育の大衆が、福と神とを簡単に結びつけ、禍と運命とを結びつけて、迷信的宗教の暗に陥りつつあることを。この本能的な宗教心は唯、教育による高き世界への止揚以外には、救われる道はあり得ない。我等は

苦悩の逃避、

苦悩をゴマ化するための阿片的享樂、

無智に根ざす迷信的祈禱、

等々の世界からやがて、本格的な生活者として、金剛の真心の獲得者にまで、この宗教心を揚棄しなければならぬ。

人生の帰結

他力本願の宗教は、苦悩に対しての生き方に於いても、逃避を許さず、涙の谷における陶酔、阿片的享樂を許さず、運命神の囚とらとなること、邪神に福を祈禱することを打破し、独立自尊の無碍道を生活すべきことを要求します。而してそれは前において述べました。

かくして、人間は人格主義的、理想主義的、道義的な願求の方向においても、人間が理性の所有者である限り、遂に止揚されたる最深、最高の宗教迄至るべきものであり、苦悩の超克、解決の方面より云うも、人間である限り、遂に一切に勝つ強者として生活者として、不動の信念を求むるものである限り、宗教そこ、純化された宗教こそ人間の最後の生活態度であることがわかります。

かくて我等は本願他力の宗教に於いてこの両方面にわたって、最純化の宗教を見ます。否、我等がかくの如く人間としての願求を深めてゆく限り、これに至るのが必然でなければなりません。

人生の意義

大地も自己も、かくして悪と苦悩との限りなき永続であること、例えば大海の波のやまぬが如くであることを諦観する時、生くべき道も、人生の意義も、芸術も宗教もこれあるが故に存在するものであることがわかります。悪も矛盾も苦悩も絶滅された世界、言いかえると宗教なき世界は、死の存在であり、動くことなき世界である。動静一如、煩惱と菩提ぼだい、生死と涅槃との限りなき止揚こそ、人間に与えられたる課題であります。生死、煩惱のなき世界を考えるのは愚である。

敢えて他力本願の宗教を高調する所以であります。